

# 父と娘の『ごんぎつね』

五十嵐まり

## 1

今から何カ月か前のこと。父と娘の二人きりの生活にも、ようやく慣れてきたころのことです。

夕食のお皿を洗い終え、エプロンを丁寧にたたんだ新一は、缶ビールを片手に、リビングに向かいました。そこには娘がいて、もらったばかりの真新しい教科書に、自分の名前を書いているところでした。黒いペンで書かれた『本田奈緒』という文字は、四年生にしてはきれいに形が整っています。

「ずいぶん立派な字を書くようになったものだ」  
心の中でそうつぶやいて、もう一度奈緒の顔を見つめました。素直に成長した娘を見ると、妙にそわそわしてしまいます。

新一は、そばにあった国語の教科書を手にとりました。

何気なくパラパラとめくって眺めていたのですが、真ん中あたりまでできたとき、その手が止まり、「あ」という、声とも言えないような小さな音をもらしてしまいました。

そこに、懐かしいお話を見つけたのです。

「まだ、あるんだ」

新一は、ビールをゴクンとのみこんで、教科書に目を落としました。『ごんぎつね』のタイトルが、新一を遠い昔に連れていってしまいそうです。

ビールを飲むことも忘れて読みふけていると、あの頃の教室が見えてきました。もちろん、もう三十年も昔のことですから、形も色も鮮明ではありません。それでも、新一は穏やかな気持ちで、心地よい空気の中に身を任せていました。

ところが、最後の一行を読み終えたとなん、全身に衝撃が走りました。そして、次の瞬間には、新一の頭の中に、三つ編みをした少女の姿が浮かんできたのです。顔立ちは